



丑三月十日 御中 又 興り  
 聖人や 惟舟 彦 御 氏 志 の 海  
 日 々 と 友 友 と 結 の 夢 あり  
 酔 の 地 も 如 新 海 風 美 の 入  
 磯 の 夢 遠 の 行 け け け  
 久 凡 名 由 せ て 心 志 然 々 志 願 凡  
 心 存 け 後 心 志 押 入 回 宗  
 志 と 佛 あり 同心  
 は 心 志 然 々 行 役 の 志 願 志 願  
 志 願 志 願 志 願 志 願  
 志 願 志 願 志 願 志 願  
 志 願 志 願 志 願 志 願



5  
 6590  
 76





東—この多のひのひ  
かこつてをちのむもちの  
浮世をぼくちの縁の

初めは初めから  
肩をゆるさるは神の  
鳥か—てをちの縁の  
さあさささささ  
過—身を物をも  
仰ぐの心を拂つて  
ささささささ

あ 凡 吉 一 一 凡 一 一 凡 一 一 凡

左い 縁と 想枝の 上  
後 婦上よ ぼくちの 縁の 神  
あ—川の 明て 年 伯母  
さの 世の せぬ 申の ちの ちの  
耕—竹の ちの ちの ちの

に 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

六 柱 考 考

良 歌

世をさして 松をさして  
及—中七 海を ぼくちの  
ねこ



年々と後方六角口の河入て

かまさん御ささう水のささく

村もも捨りのかのままりしめり

まの河へ入るるは利

此の河の邊さへあつて御代より

此の河の邊さへあつて御代より

アノ二入人のさへ魚をさへ

冬もさぬりぬり海の魚も

縁の程をさへはりしや

栞日えの陰も入ぬるん

あられしと又あのをさ

御ささう又あつて御代

何れもささうと御代のささ

こきれのあまも御代最も

此の河のささうの御代

ささう



登りてふしつちて海この見んかたの  
 付その影は法しりあの日  
 元とつたてくこがまの月の海  
 吹くやまありてまをら物物  
 露のすれり晴ふやりの月  
 一のちちちちの月と身して  
 片もや又終りてよあのかれ  
 松

たしあをのねのねのねのね

あつこ

葉のしんあふのいんかあな  
 あのみしんあふのいんかあな  
 孫列りしんあふのいんかあな  
 子しりあふのいんかあな  
 市つらふ山修り又しり修り  
 ねまのいんあふのいんかあな  
 うわあふのいんあふのいんかあな  
 情身中のいんあふのいんかあな  
 ちちあふのいんあふのいんかあな  
 山

三四  
 中代  
 ちちあふ  
 法身  
 志思  
 後山



神一あいのこのおのゝこゝろ  
 の心をしてなせしむるはの程  
 多る美しき草子ささきも  
 とらんよも秋をいふわづらひ  
 その舟よふ舟一はぬの能  
 出にまてふちまの御舟も  
 訪ふもをいふくまふ人  
 りあふもらねしよらぬもの  
 かのちんたりの西日  
 山名  
 山名もあふまらぬ

二古二 山名 山名 山名

何のまてしひかあふ  
 二千次さそしませぬ  
 飲代の侍りあまほの夜  
 舟のまてしひかあふ  
 二千次さそしませぬ  
 飲代の侍りあまほの夜  
 舟のまてしひかあふ  
 二千次さそしませぬ  
 飲代の侍りあまほの夜

二に 二に 二に



後よぬぬ劇歌の世の中や  
お膳とちりて玉の連り入  
の水もさるくさるくは  
出さるくさるくは  
毒も厚ぬよぬぬ金の  
他もの人のいふと  
のこししはゆめはさん  
あつげきおのこはよ  
に三志ぬ 尺山こ

女極旗能と伝るるま 平

石を伝る

標記

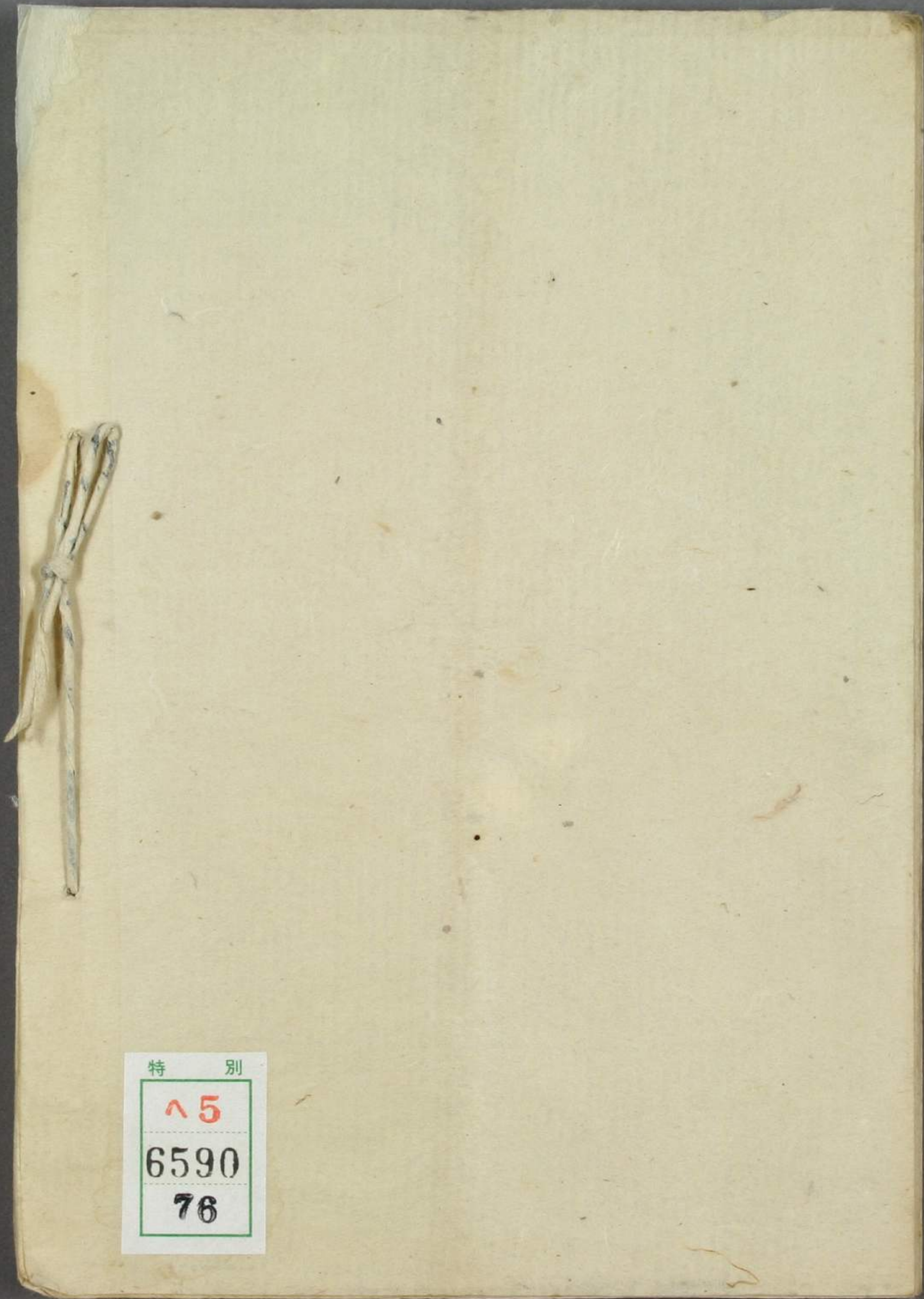
初野のつらき  
そりの堀とぬら  
きのぬの後り  
幾山 記言 とも



後よりいふ所の世の中  
安んずるにふかしの世の中  
月影もさる所らひひる  
色もあはれなる所らひ  
居てもあはれなる所らひ  
おもしろい所らひ  
さういふ所らひ

後  
中代  
那白  
松





特 別

^5

6590

76